

15世紀フランス「内乱期」における カボシャン蜂起

近 江 吉 明

はじめに

カボシャン蜂起を民衆蜂起論の視点から分析するには、いくつかの前提研究が必要となろう。というのも、これが1413年のパリ都市民蜂起としての枠組みでの、単純な民衆蜂起といった側面からのみの研究ではどうしても整理しにくい諸局面、複雑な政治的動向を併せ持つ都市民の運動だからである。この問題を克服するために、筆者は二つの論稿をまとめた¹⁾。当該蜂起の政治史のおよび都市史的位置の確認と、勃発前夜における蜂起情勢の複数次元からの再検討であった。

本稿では、上記の論稿に続き、第一に当該蜂起の事件史的事実経過を、主にA=コヴィルらの仕事や代表的な「年代記」・「日記」²⁾³⁾などの史料に基づきやや詳しく描き出し、蜂起の全体像を明らかにし、第二に、蜂起の政治史的諸側面を多角的に捉え、蜂起の重層的な性格を抽出し、第三に、蜂起を支えた人々およびこれに抵抗した都市民の存在を蜂起展開との係わりで捉え、蜂起の基本的性格を浮き彫りにしてみたい。

前稿にても明らかなように、カボシャン蜂起研究は時系列的に1413年4月27日から同年8月4日までの約3ヶ月の動きだけではなく、とりわけ、そこに至るまでの前史の把握が重要であった。再整理すれば次のようになる。一つにはアルマニャックとブルギーニョンの王国政府内部でのヘゲモニー闘争の激化である。これが軍事的対立へと発展して、王国政府の中心

都市パリの奪還をめぐる軍事衝突へと突入していた点である。そのため、単に権力側の平和維持能力の衰退が際立ったばかりか、パリ周辺諸地域の農業生産減少にともなう食糧確保の困難さやパン価格の高騰などの経済的・社会的危機状況が深化することになった。二つには、先のマイエ蜂起後、王権によって剥奪されていた自治的権限や特権が1412年の勅令によって完全に回復されるに至っていたという点である。この過程で、ブルゴーニュ公ジャン（Le duc de Bourgogne, Jean sans Peur, 無畏公, 1371～1419）とパリの食肉関連業者、ならびにパリ大学との政治的「連帯」が強化され、反アルマニャックの姿勢が鮮明となっている。三つには、パリ内部の都市内対立の諸構図が顕在化したという点である。これは、G=ボワの領主制の危機解釈⁴⁾の中で言われる現象の一つでもあるが、王国政府の身分王政的再編の流れに追随した特権の富裕商人や有力な王族諸侯に癒着していた御用商人・職人に対する、それ以外の商人・手工業各業種の人々による物言いの動きである⁵⁾。当該蜂起はこれらの歴史的背景の下に展開するのであった。

本論に入る前にもう一つ見ておかなければならないのは、1412年8月のオーセールの和議から1413年4月末までの蜂起勃発前夜の動きである。とりわけ注目すべきは、1413年1月30日開催の全国三部会前後の政治的動向である。和議後、アルマニャックの政治勢力も含めて展開されたその政治闘争はカボシャン蜂起に直結する対立の構図を浮き彫りにしていた。おおまかに整理すれば、三つの政治勢力の台頭とも表現できる人的結合の再編であった。第一の勢力は、ブルゴーニュ派の結集のシンボルであった緑の垂れ頭巾と国王万歳の銘の入った聖アンドレ十字架付きネックレスを着用していた「カボッシュ党派」である。この勢力は、ブルギーニョンと食肉関連業種を中心とした反特権のパリ都市民との協力関係、ブルゴーニュ公とカトリック聖界勢力の要であったパリ大学との歩み寄りを基礎に、強力な政治ベクトルとして機能し、いくつかの政治闘争の場面でその実力を発

揮していた。第二の勢力は、王国政府のなかでのヘゲモニー奪取を図るアルマニャック諸侯と彼らとの政治的癒着を深め、御用商人化していたパリ有力都市民層のゆるやかな結合関係である。ただし1413年初頭においては、第一勢力との関係においては防戦を強いられていた。第三の勢力は、王太子のルイ＝ド＝ギュイエンヌ（Louis de Guyenne）とシャルル5世時代から家産的官僚に登用されていた特権的商人層との強力な人的結合であった。王太子は精神的病のために実権を行使できなかった父王シャルル6世（Charles VI, 1368～1422, 在位1380～1422）に代わり国王顧問会を主催し実質的に王権を代表していた。彼は、アルマニャック諸侯のシャルル＝ドルレアン等に接近するなど、義父のブルゴーニュ公に反旗をひるがえし身分王政推進派のエネルギーを背景に王権の拡大をめざした。蜂起勃発につながる元パリ奉行による4月27日のバスティーユ砦の占拠も、彼の命令によるものであった。⁶¹

オーセールの和議後のパリにおけるブルギーニョンの勢力拡大とアルマニャックの後退傾向といった政治情勢と、新たに頭角を現した王太子等の勢力も含めたこの三つの勢力の執拗なヘゲモニー闘争の激化という現実が、カボシャン蜂起勃発の底流にあったということを確認した上で、以下、分析に入ることにしよう。

I. カボシャン蜂起の経過

当蜂起の経過を整理し述べるに当たり、これを「バスティーユ包囲からサン＝ポール館襲撃への動き」、「5月22日事件前後」、「蜂起終盤の変化」の三段階に分けることにした。各段階は、時系列的区分ではあるが蜂起展開の内容において均質ではないにしても一定の特徴的側面を持っていて、蜂起をめぐる政治情勢の絡みや蜂起それ自体の変化を追跡するのに最適だからである。蜂起衆の存在とその規模、蜂起衆の行動の内容とその目標、暴力行使の場面、蜂起展開の場所などの特定およびその推移、さらに、蜂

起指導層の動きや発言、ブルゴーニュ公も含めた王国政府関係者の動向の確認を行なうことになる。

(1) バスティーユ包囲からサン＝ポール館襲撃への動き

1413年4月27日、木曜日の午後、パリ民衆がグレーヴ広場に集まった。王太子のギュイエンヌ公ルイが、彼の書記官でブルゴーニュ派のジャン＝ド＝ニエッル (Jean de Nielles) をその職務から解任し、それを元奉行のピエール＝デゼサールの親族のジャン＝ド＝ヴァイイに代えることを決定し、デゼサールをバスティーユに呼び戻していたからである⁷⁾。先の全国三部会での議論や改革委員会の動きに期待し、平和維持や課税問題について具体的な進展のあることを静かに見守っていた多くのパリ都市民にとって王太子の行動は許せないものであった。パリ商人頭のアンドレ＝デペルノン (Andre d'Espernon) の「指示」によってパリ市夜警団の50人組や10人組の組織が動き、この数千人の緑の垂れ頭巾と聖アンドレ十字を身につけた集団が中心となり集まりこれに大勢の群衆が加わった。パリ民衆は王太子と元奉行が国王をパリから連れ出しパリを破壊する「陰謀」を企てたとの「噂」を信ずるようになっていたので、この夜警団の動きが人々の不安感をさらに煽ったと考えられる。この時、市庁舎前で群衆を指揮していたのは食肉関連業種の「カボッシュ党派」のメンバーであった。『サン＝ドニ年代記』には、ドニ＝ド＝ショーモン (Denys de Chaumont)、シモン＝ル＝クートゥリエ (Simon le Coustellier, Caboche カボシュと言われた)、ジャン＝ド＝トゥロワ (Jean de Troy) の三人が、また、『モンストルレ年代記』にはエリオン＝ド＝ジャックヴィルの名前が挙がっている¹⁰⁾。そのため、当該蜂起が「カボシャン」と言われることとなった。

4月28日、夜警団や群衆が再び市庁舎前に集まった。パリの商人頭達はそこで群衆への武器貸与を行ない、ブルゴーニュ公の側近であったジャックヴィルやシャルル＝ド＝ランス (Charles de Lens)、ロベール＝ド＝マイ

イ (Robert de Mailly) に指揮をさせて3千人の武装蜂起団を作り上げた。¹¹⁾この蜂起衆がピエール=デゼサルに抗議し、砦を包囲すべくバステューユへと押しかけた。デゼサルは発言し交渉しようと城壁に姿を現したが無駄であった。その後ブルゴーニュ公も駆けつけ、元パリ奉行に降伏するよう説得することを蜂起衆に約束したが事態を収拾することはできなかった。それどころか、バステューユには2万から2万5千人と言われるほど多くの民衆が集まり、蜂起衆と化し王太子に対する不満を募らせ¹²⁾た。

最も過激な蜂起衆はサン=タントワヌ通りを引き返して、王太子の居るサン=ポール教会に隣接したギュイエンヌ館に押しかけている。J=ド=トゥロワをはじめとして、「カボッシュ党派」の面々も一緒であった。¹³⁾ここでもブルゴーニュ公の仲介があり、王太子のルイ=ド=ギュイエンヌは窓越しに蜂起衆と話し合っている。蜂起した理由を問われたのに対して、蜂起指導層は当館にいる「裏切り者」の引渡しを強要している。それには、側近の中には誰一人として「裏切り者」などいないと王太子が返答したが、書記官のJ=ド=ヴァイイがその名前の提示を求めたため、今度は、J=ド=トゥロワが失脚を求められている50人のリストを提出した。これをこの書記官が声を上ずらせて読み上げると憤慨した王太子は国王のいる部屋に逃げ帰っている。これが合図となり、ブルゴーニュ公の制止にもかかわらず蜂起衆がギュイエンヌ館の門扉を打ち破り館内に侵入している。王太子の部屋で数人が捕らえられたのをはじめ全体で15名が拘束されている。その中には、エドワール=ド=バル公 (Edouard de Bar)、王太子の侍従のジャック=ド=ラ=リヴィエール (Jacques de la Riviere)、J=ド=ヴァイイの他、当館の召使たちが含まれた。ブルゴーニュ公や公の娘で王太子の妃の釈放懇願にもかかわらず、誰も蜂起衆の行為を止めることはできなかった。¹⁴⁾ブルゴーニュ公と王太子との間の口論の後、拘束された15名は蜂起衆によってブルゴーニュ公の居館であったアルトワ館に連れて行かれて

いる。公が王太子に拘束者の生命の保証を約束したこともありルーヴルではなく公の目の届くところにした可能性は高い。蜂起衆の移動に際し、何人かの不運な者がアルマニャック派ではと咎められ、路上で殺害されている。¹⁵⁾

4月29日、事態は継続していた。28日の晩から夜警団のメンバーではない蜂起衆の一部が武装したまま夜通しバスティーユのデゼサルと彼の守備隊の逃亡を阻止するため見張りを継続していたが、この蜂起衆の行動が新たな動きを示し始めている。彼らはバスティーユの明け渡しを求めたからである。そのため、この場に再度ブルゴーニュ公が登場している。蜂起衆に対する前日の約束を果たすためであったが、史料から読み取れる状況からすればデゼサルの方からの救助要請に公が答えるというものであった。¹⁶⁾二人の話し合いの後、デゼサルの側の降伏と同時に、ブルギーニオン派兵士の監視（「保護」）の下に彼のバスティーユ居住を認めるという条件を公が蜂起衆に提示し、彼らはこれを受け入れ包囲網を解除している。彼らの公への「信頼」を示す場面であった。

しかし、それでもこの食肉関連業種中心の蜂起衆の「勝利」は、パリ都市民の不安を解消するものではなかった。デゼサルと王太子の側近が国王および王太子を連れ去るための陰謀を企て、パリ周辺のヴァンセンヌの森に兵を集めパリを破壊するのではとの恐怖感とその「噂」が伝わっていたからである。¹⁷⁾そうした情勢の下で、5月1日に蜂起指導層はブルゴーニュ公のアルトワ館に預けられていた15人の「裏切り者」やバスティーユにいるデゼサルの身柄引き渡しを求めるなど蜂起の早期達成をめざし、前者をルーヴルに、後者をグラン-シャトレに収監している。さらには諸王国都市宛に書状を送り、当該蜂起の目的を十分に説明し、蜂起は王国の善政を求めるものであり王権への愛着と国王に対する尊敬の念に基づく行動であることを表明している。¹⁸⁾これは、いわばカボシャン蜂起の中核を担うパリ都市民の蜂起衆の「一人歩き」現象ともいえる自立化の動きと言え

なくもない。これに対して、「カボッシュ党派」の他の二つの勢力においても微妙な対応の変化が生じている。パリ大学は和平確立のための仲介の約束は守り蜂起行動に理解は示しつつも、だからといって蜂起に積極的に乗り出そうとはしなかったが、他方、ブルゴーニュ公は5月8日にパリの助役であったJ=ド=トゥロワとJ=ロリヴにワインの大樽をプレゼントするなど、蜂起との関係を重視する姿勢を示した。¹⁹⁾

蜂起の指導層も、ここに至って「カボッシュ党派」としてのまとまりを期待しなくなっている。勃発から3日間にわたる蜂起の展開で自信をつけた彼らは、蜂起への帰属意識と敵味方の確認のために、緑の垂れ頭巾ではなく新たに「白の垂れ頭巾」の着用を決めて蜂起の独自性を強調している。白い頭巾は3～4千作られ、国王、ギュイエンヌ公、ベリー公、ブルゴーニュ公もこれを着用して蜂起を容認する姿勢を示し、5月末にはパリ中に広まったとも言われた。²⁰⁾

(2) 「5月22日事件」

5月に入っても、食肉関連業種の関係者を中心にほとんど毎日のようにデモや小競り合いが続き、敵対していると判断された都市民が逮捕されるという事態が起こっていた。この蜂起情勢をさらに高揚させたのが王国都市ガンの代表団の存在と彼らの行動であった。彼らは、ガンの特権と自立に非常に執着していたのでパリ都市民と非常に親しくなり、蜂起の象徴となっていた白の垂れ頭巾を被り、それ自体有効性をもったものではなかったがいかなる場合でもパリの人々の財産と生命を守ると約束している。²¹⁾ A=コヴィルも言うように、これが蜂起の合法性をイメージアップするのに大いに役立ったとみて間違いないであろう。

例えば、サン-ポール館の前には連日多くの蜂起衆が押しかけ、とりわけ、国王役人たちの政治的不手際や財政的不正、道徳的退廃を問題にしてこれに抗議した。5月10日にはカルメル会派の修道士、ウスタッシュ=ド=

バヴィイ (Eustache de Pavilly) によって王太子のギュイエンヌ公ルイに対する説得と王国改革委員会の仕事の促進, 告発されている国王役人を裁く特別法廷 (「特別刑事裁判委員会」) の設置などが要求されている。この時, そこに集まった蜂起衆は白の垂れ頭巾を着用した1万2千人に達していた。王太子も何人かの国王役人とサン-ポール館の関係者を裁く刑事法廷の設置を受け入れている。²²⁾

翌, 11日には前日に王太子に示されていた「裏切り者」の逮捕が始まっている。その中には, 国王の指示無しに武装することに反対していた商人や都市民も含まれていた。さらに数を増やし急進化した蜂起衆は再度サン-ポール館に出向いている。この勢いに圧倒された王太子は J=D=ニエッルの大法官職への復帰と, E=D=ジャックヴィッルのパリ防衛隊長, S=カボッシュのシャラントン橋守備隊長, D=D=ショウモンのサン-クルー橋守備隊長任命を受諾している。首都防衛をいずれも当該蜂起の指導者たちに任せるという大幅な譲歩であった。そればかりでなくブルゴーニュ公が受け持っていたバステュー砦の守備隊長が, 外科医の J=D=トゥロワの息子, アンリ=D=トゥロワ (Henri de Troyes) に代えられた。これで, 蜂起指導層と蜂起衆とによるパリの全権掌握は確実となったと判断できよう。この事態の変化にブルゴーニュ公も異を唱えることができなくなっている。パリ市の実権を蜂起指導層に奪われ, また, 蜂起衆の増加と彼らの過激な行動を前にして, ブルゴーニュ派の動揺も増大していた。ブルゴーニュ派に属していたオルレアン公の兄のヴェルトゥ伯が密かにパリから逃亡している。²³⁾ ギュイエンヌ伯も何度か試みていて失敗していることなど, 国王顧問官たちの逃亡も認められる。²⁴⁾

そうした蜂起情勢の推移の下, 5月15日には蜂起衆の興奮状態が収まり, 18日には, 久しぶりに精神的安定を回復した国王シャルル6世が自らの健康回復に感謝すべくノートルダム寺院に赴いた。大勢のパリ民衆も聖堂に集まったが, 蜂起指導者の J=D=トゥロワやパリ市の助役たちが国王

の下に駆けつけ、パリ市の自由および蜂起の象徴であった白い垂れ頭巾を国王に差し出している。国王もこれに応じ、高等法院長やパリ大学長もこれを受け取っている。²⁵⁾しかし、4日後の22日（月）に蜂起衆のあらたな動きが見られる。パリ市の夜警団が武装し、市門が閉鎖された。というのも、ヴェルトゥ伯の逃亡のことやパリ周辺へのアルマニャック派兵士の集合のことなどが噂され、さらに王太子のギュイエンヌ伯の逃亡の可能性や国王の誘拐が心配されたからである。²⁶⁾

この日、白の垂れ頭巾を着用した蜂起衆が国王のいたサン-ポール館に大挙して押しかけた。そこにはベリー公、ブルゴーニュ公、シャルル＝ド＝ロレーヌ、ルイ＝ド＝バヴィエール、サン-ポール伯等がいたが、国王は蜂起衆の指導者との謁見に応じている。E＝ド＝パヴィイが代表して当蜂起の動機や狙いについて改めて説明し、新たな粛清と改革を求めている。ブルゴーニュ公は国王の健康を損ねかねないとして、蜂起衆が武装していることを非難したが、これにJ＝ド＝トゥロワはパリの人々は国王の幸福のみを欲していると繰り返し、粛清対象者の書かれた名簿を逆にブルゴーニュ公に手渡している。そこには王妃の兄のL＝ド＝バヴィエールやブルジュの大司教で王妃の聴罪司祭でもあったギヨーム＝ボワラティエール等も含まれていた。ブルゴーニュ公が蜂起衆と王太子との交渉をとりもったが、結果は蜂起衆の脅迫に屈せざるを得ず、館内にいた対象者は捕縛され王宮とルーヴルに拘留されている。身の危険を感じたブルゴーニュ公も自分のアルトワ館に保護していたバル公等の捕虜を蜂起衆側に引き渡している。²⁷⁾

「5月22日事件」は、「カボッシュ党派」としての一体感に亀裂を入れることになった。すでに、ブルギーニオン勢力側にもカボシャン蜂起の一人歩き現象に不安を覚えるむきがあったが、ブルゴーニュ公自身も不愉快な状況の中に引き込まれていることを自覚せざるを得なくなっている。また、ピエール＝コション（Pierre Cauchon）は別としてもパリ大学はこの事件後、蜂起衆との距離をとることを選択している。²⁸⁾しかし、この段階で

ブルギーニオン派は蜂起の急進化を抑える手段を持っていた。それは王国改革の路線であった。

「王国改革委員会」が1413年2月13日以来、改革をめざす法的文章の入念な作成作業が中断されることなく進められていた。改革委員会のメンバーは以下の通りであった。全員がブルゴーニュ派に結びついていて、何人かは「カボッシュ党派」に巻き込まれていた。

〈表1〉

(大学関係者)

1. ピエール=コション
2. ジャン=クートキュイッス (Jean Courtecuisse)

(聖職者)

3. ジャン=トワジ (Jean Thoisy, トゥールネイ司教)
4. シモン=ド=ソー (Simon de Saulx, ムーリエ-サン-ジャン大修道院長)

(貴族)

5. アミアン司教代理
6. オフェモン領主
7. ブラリュ領主
8. モワ領主

(都市民)

9. ジャン=ド=ロリヴ (Jean de l'Olive, パリ市助役)
10. ジャン=ド=ロングウイユ (Jean de Longueil, 高等法院顧問)

5月26日(金)の午前中、パリ高等法院の大会議室(「親裁座」)に国王、王太子、ベリー公、ブルゴーニュ公、さらにはパリの商人頭、助役、有力都市民、パリ大学の代表者達が集まり、国王が全259か条の勅令文を

朗読して発布している。当日は96か条にとどまり、残りの163か条は翌日に回されている。³⁰⁾この中では、王国行政のあらゆる部門が問題にされていた。しかし、「カボシャン勅令 (Ordonnance cabochienne)」と題した勅令発布であったにもかかわらず、蜂起指導者や蜂起衆を満足させていたようには見えない。まず、当勅令作成過程に彼らの改革理念なり具体的要求が反映されていたようには見受けられず、次いで、公布の場には、彼らの主体的判断の結果なのかどうかは別としても、姿を見せていないことから明らかであろう。

勅令発布の演出を実施した委員会のメンバーは5月29日(月)にサンポール館に集まり、代表して発言したJ=クートキュイッスは、各自の仕事の再開と暴力の回避をうったえている。しかし、蜂起衆の過激な行動は継続され、6月10日にはJ=ド=ラ=リヴィエールとジャン=デュ=プティ=メニルが処刑されている。この決断はカボシャン蜂起の強権的側面を示す変化であった。とりわけ5月22日事件後、「カボッシュ党派」としてのまとまりが崩れてきてはいたが、この処刑という実力行使は多くの親カボシャンのパリ都市民をも離反させることにつながっている。6月15日には、さらに三人の捕虜を中央市場で斬首し、7月1日にはついにP=デゼサル³¹⁾を処刑するに至っている。

(3) 蜂起終盤の変化

カボシャン蜂起の指導者達によるパリの政治的支配も強引さが目立ち始めている。5月22日事件以来国王によって「パリの統治者」と認められていた蜂起指導者達は、5月24日、会議中の国王の前に大勢の武装蜂起衆とともに現われ彼らの一連の暴力行使の承認を求めている。³²⁾さらに王国行政人事にも介入し、王国大法官をアルノ=ド=コルビに代え王国会計院長官のウスタッシュ=ド=レトル (Eustache de Laitre) にしている。³³⁾また、イングランド軍との戦争費用を捻出するためパリ都市民への強制的借金を決定

し、借金の割り振り委員会のほかにカボシャン指導層からなる「取立て委員会」を組織して割り当て金の徴収を強化した。この強制的借金に従わねば投獄された。国王弁護士ジャン=ジュヴェネル (Jean Jouvenel) は2千エキュと査定されたが、それを拒否したためシャトレ牢獄に投獄されている。強制的借金が課せられたのは蜂起に反対したか、それに消極的な富裕都市民であった。大学も大目には見られなかった。ノートルダム書記官の一人であったジャン=ジェルソンの場合は、アルマニャック派ではないかと噂されていたが、支払いを拒否したため彼の家屋は略奪され金品を奪われ、彼自身もノートルダム大聖堂に身を隠さざるを得なくなっている。³⁴⁾

他方で、蜂起指導者側はパリの権力奪取方法を正当化する書簡を7月はじめに各王国都市に送っている。³⁵⁾ これはパリ都市民の蜂起からの離反傾向とパリ周辺のアルマニャック派の軍事的行動に対する牽制の意味を持ったものと判断できる。こうした状況を察したかのように、7月10日にはノルマンディー地方のヴェルヌイルでカボシャン蜂起に対抗する会議が開催されている。これにはシャルル=ドルレアン、ルイ=ダンジュー、ジャン=ド=ブルターニュ、ジャン=ド=ブルボン、ジャン=ダランソン、フィリップ=ド=ヴェルト等アルマニャック派有力諸侯が参加して、彼らはパリの蜂起指導層にたいして調停者としての姿勢を示し講和会議を提案するということをしている。³⁶⁾ この和平提案がたまたま国王の健康回復と重なったこともありパリでは歓迎の機運が強まり、それを受けて国王はブルゴーニュ公の同意の下にヴェルヌイルに改革委員のJ=ド=トワジとともに使者を遣わしている。³⁷⁾

7月14日、パリに戻った使者は大法官や高等法院のメンバーの前で、オルレアン公にもブルゴーニュ派との対立の意図はなく、パリのカボシャン蜂起鎮圧の思いだけであることを伝えている。高等法院によるアルマニャック派との交渉開始の提言を受けて、国王は王太子とともに市庁舎に

出向き今や「穏健派」となっていたパリ市の商人頭や助役、それに有力都市民に協力を求めた。この場には蜂起指導層のE=ド=ジャックヴィル、D=ド=ショウモン、S=カボッシュ等が100名の仲間とともに乱入し、「我々の意見は、この偽装された和平を破棄すべきだということである」と喚き、この会議に介入している³⁸⁾。この行動は、蜂起勃発当初から「カボッシュ党派」の影響下にあった商人頭や助役などパリ有力都市民の反目にたいする蜂起指導層の危機感の表われと見ることができるだろう。しかし、和平に同意することは「国王および王国都市パリへの裏切りとして逮捕する」³⁹⁾との脅迫もこの新たな状況の流れを押しとどめることに役立っていない。逆に不安を持ち始めたのは蜂起指導層のほうであり、数々の死刑判決を出していた「特別刑事裁判委員会」も5月22日以来収監していた王妃関係の婦人たちを釈放している⁴⁰⁾。

こうした事態の変化の中で、蜂起指導部は2千人の都市民兵を組織し、E=ド=ジャックヴィルがこれを指揮してオルレアン勢力に先んじてモントゥルーまで進軍している。ブルゴーニュ公はといえば、カボシャン蜂起の急進化に手をこまねいていたが自分および自派の政治的立場の維持に必死になり始めている。7月22日にはポントワーズで和平交渉を始め、ベリー公とブルゴーニュ公はアルマニャック派の使者と会談を継続して、一週間後に協定案がまとめられた。その内容はパリの蜂起衆も含め総ての者が許されるというものであり、大赦の実行を保証した新たな公式書状が付与されることになったが、同時にアルマニャック側は国王に対して、総ての武装化の停止、王国の敵に対抗する軍隊を除きその他の一切の徴兵命令の取り消し、接收および占拠していた総ての城館や砦の原状復帰、パリの蜂起指導層および特別刑事裁判委員の解任、さらには必要があれば通常裁判で裁くよう求めていた。明らかに報復の意図が含まれたものであったので、ブルゴーニュ公およびパリの有力都市民も慎重になり、パリ郊外での国王、王太子を含めたアルマニャック派諸侯との会談要請には反対してい

る。⁴¹⁾ というのも、協定とはいえ政治的力関係によって如何様にでも解釈可能な不十分な内容のものであったからである。

8月1日、ベリー公とブルゴーニュ公は国王と王太子および国王顧問官らの待つサンポール館に到着し、ポントワーズの協定内容を読んでよく調べながら報告している。翌、8月2日には協定を和平提案と捉え、それについて協議した高等法院やパリ大学が賛同を示している。国王の要請で市庁舎に集まった商人頭や助役達、さらには各街区の代表者達も激しい議論の末、和平への期待を表明している。この場に蜂起指導層が武装した蜂起衆とともに乱入し、「偽装和平」提案をしたオルレアン派諸侯を非難する緊急動議の採択を要求した。これに対して、パリ市助役の一人のロベール＝ド＝ベロワ (Robert de Belloy) を先頭に、両替商のピエール＝オジェー (Pierre Oger)、大工のギヨーム＝シラッス (Guillaume Cirasse) 等の「穏健派」がカボシャン蜂起衆の怒号にもかかわらず、投票は翌日にしかも街区ごとに実施することを逆提案している。蜂起指導層は街区ごとの投票が彼等には不利であると考え、さらに3日間の採択延期を求めたところ、すぐに国王によってこの猶予期間が認められた。⁴²⁾

8月3日に、カボシャン蜂起指導層と蜂起衆はパリ都市民が和平案を拒否するよう各街区にて工作に入った。シテ地区では、J＝ド＝トゥロワが街区の夜警組織をサン＝テロワ修道院に召集し和平案に反対するよう迫っている。ところが、この会場に今や「第三の勢力」支持の「穏健派」の代表的存在となったJ＝ジュヴェネルがおしかけ、「和平だ！ 和平だ！」叫ぶように反論しカボシャン側のねらいを阻止している。このせめぎ合いの結果、レ＝アル (中央市場) やアルトワ館周辺は別としてパリのほとんどの街区が和平案支持に傾いていった。⁴³⁾

8月4日、J＝ジュヴェネルは数千人の和平支持の「穏健派」都市民を引き連れてサン＝ポール館に赴き、国王に対して和平締結に向けて行動するよう要求している。その後、彼等は王太子の許にもかけつけ、バス

ティーユ砦の奪回など蜂起勢力からの権力奪取に向けての打ち合わせをしている。周到な段取りを進め、夜にかけて彼等はサン-ジェルマン-ロゼロワに武装し再結集している。これ対して、蜂起勢力側はグレーヴ広場に蜂起指導層を中心に結集し翌日に備えていた。一方、ブルゴーニュ公は「穏健派」に急接近したベリー公とは違い蜂起勢力の厳しい現状を察知し、彼等の敗北およびその後の報復の動きを心配し始めている。彼は両勢力の集まるところに出向き武力対決を静めようと試みたが無駄であった。他方、そのころ国王はパリ大学と高等法院の代表者達とサン-ポール館にて面会して、ポントワーズの和平に正式に同意することを確認していた。⁴⁴⁾

市庁舎ではJ=D=トゥロワ、J=ルゴワ、D=D=ショーモン、S=カボッシュ、G=D=サンティヨン等がグレーヴ広場に集まった武装都市民に訓示を始めたが、彼らはこれに従おうとはせず、逆に和平への期待を表明し始めている。この場面で、5人の仲間とともにやって来たJ=ジュヴェネルは「和平だ！和平だ！それを欲しない者は左へ、それを欲する者は右へ」と叫びカボシャン派都市民に揺さぶりをかけると、ほとんどの者が右側へと整列している。ここにカボシャン蜂起は結末を迎えることとなった。蜂起指導者たちは隣接する通りへと逃げ去っている。⁴⁵⁾

パリ中の鐘が鳴り響く中、王太子のギユイエンヌ公はJ=ジュヴェネル等によって指揮された都市民たちとともにバステューやその他の牢獄に向かい、L=バヴィエールやE=D=バール等の総ての捕虜を自由にしている。⁴⁶⁾ こうして、それまでカボシャン蜂起を支持していた民衆は手のひらを返すように「第三の勢力」支持へと一気に変身していくのであった。そうした中、ブルゴーニュ公は8月23日にパリを去っている。

II. カボシャン蜂起の政治史的側面

以上の蜂起経過からもわかるように、蜂起指導層や蜂起衆の動きの前後あるいはその周辺に「カボシュ党派」政治勢力の影があり、その付かず離

れずの動きが蜂起展開を規定している場面も散見される。最も目立っているのはブルゴーニュ公である。ここでは公の行動に注目しつつブルギーニョンと「第一の勢力」および王太子を中心とした王国政府内の「第三の勢力」との力関係を追跡してみよう。一つは4月28日のギュイエンヌ館での一連の動きであり、二つには「5月22日事件」の場面での振舞いである。最後には、7月10日からポントワーズの「和平」受諾をめぐる諸勢力の駆け引きの状況下に注目することになる。

(1) ギュイエンヌ館での演出

4月28日、ブルギーニョン派や王国都市としての自治権や特権を回復したばかりのパリ市当局により組織された3千人の武装蜂起集団が確認されているが、ブルゴーニュ公の指導の下に動いていたと判断するのが自然であろう。その結果、『サン・ドニ年代記』が言うように2万人近いと記録された⁴⁷⁾バスティーユ包囲の蜂起衆が出現している。ここで元パリ奉行のデゼサルに対し降伏を説得したのもブルゴーニュ公であった。蜂起勃発初期におけるこうした公の政治的行動をもっとも良く伝えているのが、その直後のギュイエンヌ館での蜂起衆と王太子との攻防の場面においてであった。

王太子に蜂起衆との「対話」を勧めたブルゴーニュ公は、蜂起指導者のJ＝ド＝トゥロワとともに50人におよぶ「裏切り者」リストの提示を演出し王太子を窮地に追い込んでいる。その直後に発生した館内への蜂起衆の乱入の際にもこれに体を張って制止するということはせず、むしろ成り行きを静観するというものであった。そのため、王太子から「義父どの、この暴動は貴方の決定によってなされたのであり、このこと（責任）から貴方は逃れられない。なぜなら、貴方の館の連中が中心人物だからである。貴方が思うようには事は常に運ばないということを覚えておくように」と叱責され、これには「ギュイエンヌ公殿、貴方の怒りがおさまってから自ら

調べてみては⁴⁸⁾」と声を荒立てるも、すぐに冷静さを取り戻し、拘束された15名の身の安全を王太子に約束するなどしている。蜂起衆がこれら拘束者を運んだ先は彼の居館であったアルトワ館であった。

翌日のバスティーユ砦における蜂起衆の明け渡し要求行動にたいしても、彼の対応は一貫している。デゼサールの降伏とブルギーニョン派兵士によるそこでの監視の決定を取り仕切り、蜂起衆を納得させている。これら一連の現象の背後には「カボシュ党派」の意志が感じ取れるところでもある。王太子のみならず、この段階での彼の行動はカボシャン蜂起と同一のものと理解されても仕方が無いものであり、それどころか、意図的に蜂起の前面に立ち政治的ヘゲモニーを発揮しているとの雰囲気的印象付けるものであった。このように、ここまではブルゴーニュ公による「第二の勢力」の完全駆逐、王太子らの「第三の勢力」に対する全面攻勢の段階と整理できるであろう。

(2) 「5月22日事件」の展開

しかし、5月1日に15人の「裏切り者」がアルトワ館からルーヴルに、バスティーユに「保護」されていたデゼサールがグラン-シャトレにそれぞれ収監されるころから、ブルゴーニュ公の影響下に陰りが見え始めている。そのこともあってか、緑の垂れ頭巾に代わって白色のそれが着用されている。前章の分析で明らかなように、蜂起の自立化と急進化のなかで彼の政治的立場は逆に危ういものとなっている。ブルギーニョン派有力者がパリから逃亡するという事件も発生していた。そのことがよりはっきりと示され、彼自身もそのことを深刻に認識せざるをえなかったのが「5月22日事件」であった。矛先は「第三の勢力」にも向けられ始めたのである。

蜂起衆との交渉役という役割は彼の政治的思惑や姿勢からして許されることではなく、また、彼の統制の下から逸脱した蜂起衆の「暴力」に恐怖すら感じることとなった。アルトワ館に保護していたバル公とJ=ド=ラ

-リヴィエール等を蜂起衆側に引き渡した⁴⁹⁾のは、その表れであった。「カボシュ党派」のもう一つの当事者であった大学が蜂起衆との連携から距離を置き始めていたが、ブルギーニョンの頭領としての彼も王太子ら「第三の勢力」に対抗しつつも、カボシャン蜂起との関係を自ら切り始めている。

カボシャン蜂起の自立化と急進化に動揺し始めたブルギーニョン派勢力であったが、しかし、ブルギーニユ公はまだ蜂起への影響力を維持したいという思いは消えていなかったと判断したい。「5月22日事件」で新たに追加された15人の「裏切り者」逮捕要求も、彼の立場からすればそのやり方に不満は残るものの、王太子等への圧力拡大という点ではむしろ歓迎して良い筈のものであったからである。すでに確認したように、「カボシャン勅令」はブルギーニユ公やP=コションらのカボシャン蜂起衆の沈静化の切り札として5月26日に発布されている。つまり、この「王国改革」のシナリオと位置づけられた全259か条の提示は、蜂起指導層と蜂起衆への影響力を取り戻して彼等のエネルギーをコントロールすることにより、王国政府権力の完全掌握をめざす「第一の勢力」の政治的目標達成のための仕掛けだったのである。その結果は先に見たとおりであるが、だからこそブルギーニユ公等の驚きは大きく、同時に、本格的な民衆蜂起の展開という事態の深刻さを改めて認識せざるを得なかった。それでも公はブルギーニョンのシンボルとしての政治的役割を、サンポール館においても蜂起衆にたいしても果たさざるを得ないという、苦渋の姿勢を放棄するわけにはいかなかったのである。

(3) 「ポントワーズ和平」をめぐる攻防

すでに確認されたように、6月に入っても継続されたパリ市内における処刑実施などの恐怖政治によって、親カボシャンの都市民さえも離反させていたが、蜂起指導層と武装蜂起衆はついに王国行政人事にも直接介入し強制借金の政策を強行している。このカボシャン蜂起の権力介入という事

態を前にブルゴーニュ公やパリ大学等ブルギーニョン派有力者、王太子等の第三の勢力、パリ市長等の市行政当局はともに傍観するだけであった。

そのような時、アルマニャック派（「第二の勢力」）から蜂起鎮定をめざした講和会議への参加要請が国王の下に届いた。これにはブルゴーニュ公も同意せざるを得なくなっている。この公の戦術的対応の変化と、使者となって出かけた王国改革委員会のJ=ド=トワジの7月14日の報告は、蜂起をめぐるパリ市内部の政治力学に決定的なインパクトを与えることになった。それは反カボシャンの政治的連合を結果的に引き出したというだけでなく、ブルゴーニュ公の王国行政の中でのヘゲモニーを消滅させた瞬間だったからである。象徴的なのは、蜂起関係者の方でもこの情勢変化を察知したからか、「特別刑事裁判委員会」が5月22日に逮捕投獄していた王妃関係の婦人たちを釈放している。

7月22日からのポントワーズでの和平交渉では、ベリー公とともにブルゴーニュ公が直接参加しアルマニャック派の使者との話し合いを行なっている。一週間後に結ばれた和平案はパリの蜂起衆も含め総ての者が許されるとは言ってはいても、明らかに蜂起関係者および初期の段階に彼等に同調したパリ市当局者、そしてブルゴーニュ公やその取り巻きにとって不利なものであった。そのため8月2日までの間にこの協定が示している和平提案の内容をめぐり、とりわけブルゴーニュ公や商人頭・助役達のところで議論が白熱した。結論は、パリ郊外での国王、王太子らを含めたアルマニャック派との直接会談要請は断ったとはいえ、また、今後の政治状況の変化次第では彼等にも追求の手がのびないとも限らないという可能性もあり慎重論の声も大きかったが、全体状況として和平への期待を逃すこともできなかったのである。

この段階でカボシャン蜂起を各段階において支えてきた各勢力が「カボシュ党派」からの完全離脱が決定したことになる。これで王国政府内でのヘゲモニーは王太子等の「第三の勢力」の手に移行し、ブルゴーニュ公勢

力の敗北は誰の目にも明らかとなった。8月8日に「ポントワーズ和平」が正式に公布され、アルマニャック派がパリに入り始めると公のバリ滞在が困難となっている。8月4日以降、蜂起指導者に対する追及も激しくなりバリ周辺での捜査も開始され、バリ内部でもJ=D=トゥロワの屋敷が略奪されるなどカボシャン蜂起関係者への報復の機運も高まっている。そうした状況下、ブルゴーニュ公逮捕の噂が広まる中、公は8月23日にヴァンセンヌの森での「狩」を名目にパリを脱出し、途中ボン-サン-マクスンスに留まった後、29日にリールに逃げ帰っている⁵³⁾。

こうして、王国政府内での権力は「第三の勢力」が掌握することとなったが、8月末にアルマニャック派のオルレアン公がパリに入るとカボシャン蜂起関係者への報復は一段と強まっていくのであった。

Ⅲ．カボシャン蜂起衆とパリ都市民

当蜂起では蜂起指導者と蜂起衆に関する情報が比較的多く確認されている。数の面では、4月27日のバステューユ砦包囲段階で2万から2万5千人、5月10日のサン-ポール館前には1万2千人が認められ、他方、蜂起の攻撃目標となった有力な富裕都市民の数も60人にも及んでいることなどがわかっている。本章では、当蜂起に際して蜂起を支えた人々と、逆に反カボシャンの立場にあった都市民の存在などを史料中から拾い出し、蜂起参加者の実態を浮き彫りにすることによって民衆蜂起としての歴史的格の一側面に接近してみたい。

(1) カボシャン蜂起の指導層とパリ都市民

当蜂起の指導層から再度みておこう。とはいえ「5月22日事件」までとそれ以降では蜂起の性格がとりわけ政治的意味合いにおいて大きく変化している。ここでは、蜂起が最も多くの都市民の参加を獲得し、積極的ではないにしてもカボシャン蜂起衆の「暴力行使」に一定の共感が得られてい

たであろう5月22日までの動きの中で捉えてみたい。

まず史料上に記載された蜂起参加者名について見ていくことにしよう。
これに関して多くを語っているのは、1413年12月12日（火）以降にパリの
シャトレ裁判所で公表された「追放者」名簿⁵⁴⁾である。

〈史料1〉

1. エリオン=ド=ジャックヴィル, 騎士 *パリ夜警団の指揮, 指導層
2. ジャン=ド=トゥロワ, 親方 *外科医, パリ市助役, 指導層
3. アンリ=ド=トゥロワ, 親方 *バステイーユ守備隊長
4. ジャン=パラン
5. シモン=ル=クートウリエ (カボシュ) *刃物屋, 指導層
6. ドウニゾ=ド=ショーモン *サン=クルー橋守備隊長, 指導層, 騎士
7. シモン=ロビヤール *仲買人
8. ローラン=カボ, 親方
9. ギョーム=ル=ゴワ *親方, 肉屋
10. ガルノ=ド=サンティヨン *肉屋
11. ユグ=ド=ヴェルダン, 親方
12. コラン=ヴァレ 居酒屋の主人
13. ジャン=ド=ルアン *臓物商パルヴァン=デュ=N.D. の息子
14. ジャン=マラー (ジャン=マイヤール)
15. ジャン=ボワヴァン 魚屋
16. ギョーム=ブルダン 居酒屋の主人
17. ペルションなる者 (6, D=ド=ショーモンの雇い人)
18. エナタン=ド=モンソー (同上)
19. ギイバンなる者 (同上)
20. ギョーム=バロ, 親方 *国王書記官
21. シモン=ボザール 塗装工

22. ジャン=ボーミエ *仲買人
23. フランソワ=ロルフール 靴屋
(ここまでは、1413年12月12日に宣告される)
24. ロビネ=ド=マイイ 騎士。*パリ夜警団の指揮
25. フェリクス=デュ=ボワ、親方
26. ギヨーム=ジャント
27. マルタン=ド=クーロミエール
28. ジャン=ラピオン、親方
29. ジャン=デュ=ボワ-オ-ラン
30. ジャン=エロ *学生
31. トマ=ル=ゴワ *肉屋
(ここまでは、1414年1月27日に宣告される)
32. トゥサン=ボジャール、親方
33. マルタン=ド=ノヴィル *ラシャ製造業者
34. ジャン=ル=ゴワ 若者、肉屋
35. ジャン=ブルボン=デュ=ルスレ、船頭
(ここまでは、1414年2月14日に宣告される)
36. ピエール=コション 学長 *パリ大学
37. ジャン=ブウ、親方
38. ドミニク=フランソワ、親方
39. ニコル=ド=サンティリエ、親方
40. ボードゥ=デ=ボルドゥ、親方
41. リジエ=ポラン
42. マイエ=ボワロ
43. ギヨーム=バイエ
44. ウスタッシュ=ド=レットル、親方 *パリ聖堂参事会員
(ここまでは、1414年5月14日に宣告される)

45. ジャン=ティヤール
46. ロバン=グピル 菓子屋
47. エティエンヌ=モロー
48. ヴァンサン=ル=バリュイエ
49. コワンティネ=デュ=アルロワ
50. ジャン=ド=サンティヨン 肉屋
51. ギヨーム=ヴィニエ
- (ここまでは、1414年5月23日に宣告される)
52. フレミノ=ド=グギション
53. ジャン=ド=トゥール
54. ダヴィドゥ=デュ=コンセイユ 皮革職人。
55. ジャン=マンフロワ
56. フィリップ=ジョスカン
57. ギヨーム=ウルトゥヴァン
- (ここまでは、1414年5月24日に宣告される)
58. ピエール=ミオット、親方
59. アントワヌ=フォレ (デ=ジョワユとも呼ばれた) *学生
60. ニコル=デュ=ケノワ、親方
61. ジャック=ド=ショワジ *仲買人
62. ジャン=ド=バルリ
63. コラン=ル=モヴェ
64. ジャック=ル=マッソン
65. ジャン=ル=フォール
66. トマ=ル=スュール サン=ドゥニの河川運行頭
67. ジャカン=ル=スュール (66, トマの息子)
68. ジャン=ル=メール (プティとも呼ばれた)
69. ドゥニゾ=ル=メール

- 70. ギルマン=ル=プロヴァンディエ
- 71. ジャン=ベルトゥラン
- 72. ジャン=ド=マントゥ
- 73. ジャン=リニャージュ
- 74. ジャン=ショッス
- 75. ジャン=ムートウル (シェロンとも呼ばれた)
- 76. トマ=ガルニエ 海水魚屋
- (ここまでは、1414年7月28日に宣告される)
- 77. コラン=ド=ヌヴィル (?) (摘発委員会によって追放される)

この後に、最初の発表から1年たった1414年12月13日付けで31名の追放者名が追加発表されている。

- 78. ジャン=マイユ 金銀細工師
- 79. ダモワゼル=マルグリット (20, G=バロ親方の妻)
- 80. マルグリット (ギヨーム=デ=ボルドゥ親方の妻)
- 81. ラウラン=ピュシン
- 82. ジャン=ル=グラ 刃物屋
- 83. ジャン=ド=ブルテュイル
- 84. ジャン=ド=マラトレ
- 85. ユゲ=ポッティエ
- 86. ジャッケ=ド=ボワ ローソク屋*シャトレ裁判所弁護士
- 87. ティエリ=マンフロワ
- 88. ジャン=ド=ロンベール (アノワと呼ばれた)
- 89. ギヨーム=マルタン
- 90. レニヨなる者 浴場経営者
- 91. ローランサンなる者 44, E=ド=レットル親方のお抱え馬番

92. ロバン (65, J=ル=フォールの雇い人)
93. ジャッケ (同上)
94. ドウニゾ (同上)
95. ウスタッシュなる者, (F=デュ=ボワ親方の従兄弟)
96. ペランなる者 F=デュ=ボワ親方の雇い人
97. フリップ=オラル 両替商
98. ジャン=ネヴー ギヨーム=ネヴー親方の息子
99. ジヤナンなる者 51, G=ヴィニエ親方の見習い人
100. テイボーなる者 51, G=ヴィニエ親方の召使
101. ジャン=プティ
102. ローラン=ド=マシ
103. ジャック=ド=クロックレ
104. ジャン=フロン=ド=ブッフ 指物師
105. ミシュル=ペランジュール
106. コラン=ジャーナル 居酒屋の主人
107. ジャン=ル=フェヴル 焼肉屋の主人
108. ジャン=ド=ポリニ (シャプランと呼ばれた)

この史料では合計108名となるが、この他にも「オーセールの和平以降、パリにおける騒動に参加した者に対する赦免に同意した1413年8月29日付国王通達⁵⁵⁾」がすでにその対象外とした者65名を挙げていて、その内43名は上述のリストとダブっているもののそれ以外の22名が確認されているので、それも合わせると追放者総数は130名に達している。その22名の者たちの名前は以下の通りである。

〈史料2〉

1. シャルル=ド=ランス 騎士

- | | |
|-------------------------|------------------|
| 2. ジョルジェ | 聖職者 |
| 3. ピエール=バルボ | |
| 4. ピエール=ロンバール | |
| 5. アンドレ=ルソー | |
| 6. ジャン=ゲラン | |
| 7. ジャン=ピモラン | |
| 8. ジャック=ロンバン | |
| 9. ジャック=デュ=サン-ロラン | |
| 10. ジャッケ=ド=ルアン | |
| 11. ジャン=ル-ゴワ | |
| 12. ジャン=デュ=ボワソラン | |
| 13. エティエンヌ=ロンバール | 仲買人 |
| 14. ジャン=ロリヤール（メルリと呼ばれた） | 皮なめし工 |
| 15. ペラン=ティラル | |
| 16. ルジエ=ポラン | 学生 |
| 17. エゴ | 学生 |
| 18. ジャン=エコベール | （ジャン=マレシャル親方の息子） |
| 19. ルースレ=ル-バトゥリエ | 皮革職人 |
| 20. イボネ=レイエ | 皮革職人 |
| 21. シモネ=ラングロワ | 靴修理屋 |
| 22. フランソワなる者 | 靴屋 |

（〈史料1〉〈史料2〉内の＊印は他の史料や研究から判明したもの、括弧内は当史料内注記、それ以外の職業名は当史料内表記）

8月29日といえばカボシャン蜂起鎮圧直後のことで、「国王通達」のねらいも65名の者への断罪を決定し知らせるというものではなく、ポントワーズ和平の約束に基づいてパリ市当局関係者など、「5月22日事件」以

降より蜂起運動から離脱して王太子等「第三の勢力」へ接近し、蜂起終結に協力した都市民への特赦を目的としていた。その脈略において、この65名だけは絶対に許せないということで特記されていて、同時にオーセール和約以来犯された殺人、略奪、金品強奪、強請りの犯人を、さらには蜂起中に貴族や有力都市民の殺害の陰謀に加わった者の摘発をめざすとの表明⁵⁶⁾でもあった。それだけに、その内22名が後の「追放者」名簿から消えたことの意味は興味深いし分析されるべきことだが、本稿では、最大で2万5千人前後、白い垂れ頭巾を身につけた約1万2千人、パリ市の夜警組織でも約3千人にもなった蜂起衆のほとんどが許されている点にのみ注目しておきたい。したがって、逆にリストアップされた130名の存在は当蜂起の展開の中で中核的役割を果たし、それぞれの場面で目立った行為を行なった重要人物たちであったということになる。8月4日の最後の日、市庁舎を取り囲みグレーヴ広場に結集したのは約400人⁵⁷⁾であったことからしても、以上の130名前後の強力な結合が形勢不利な状況の中でも機能していたことを示している。

さて、前記の史料から言えることは、蜂起の中心となり蜂起衆をリードしていたのが食肉関連業種に係わる人々であったということである。この130人が最大で2万5千人ほどのパリ都市民を動かしたのである。さらに、職業名のはっきりしない者を別としても多様な業種の親方が含まれていたという点も当蜂起の特徴の一つであったということになろう⁵⁸⁾。ラシャ製造業者、金銀細工師、指物師、塗装工、両替商、居酒屋、浴場経営者、菓子屋、水上商人などが確認される。彼等が食肉関連業種の親方同様に50人組や10人組にかかわったばかりでなく、職域内の徒弟や雇い人まで組織し、街区内の日雇人層や浮浪者を蜂起へと誘ったのである。学生⁵⁹⁾の存在も無視できない。パリ大学長自らがこれを組織したのかどうかは見えてこないが、前年からの「カボシュ党派」の政治的結合⁵⁹⁾の存在とその影響力の強さを考慮すれば、パリ大学に係わる学生が全員ではないにしても蜂起の前

面に登場したのも自然といえよう。また、〈史料1〉の34, 67, 79, 80, 98, 〈史料2〉の35, 36, 37, 61の各番に登場する人々の存在は、当蜂起のもう一つの側面ともいえる女性や若者の参加として注目される。さらに、散見される家族ぐるみの参加事例も重視すべきであろう。

彼等をこれほどの大規模な蜂起行動に駆り出しえたのは、今のところ確認されていることとしては王国行政に寄生していた「悪徳顧問官や役人」の解任および逮捕による「王国改革」推進への待望と、「パリの防衛」による生活の安定と平和維持の実現であったということになる。ブルギーニュ公など「カボシュ党派」が陰に陽に影響力を及ぼしえたのもこの部分だったのである。この政治的流れは1413年4月末に突如として表れたものではなく、王国都市パリの自治権拡大の動き⁽⁶⁰⁾（1412年1月20日勅令）であり、また、1413年1月30日の全国三部会開催以来の改革の機運⁽⁶¹⁾を前提にしていたことが理解されるであろう。

(2) カボシャン蜂起に抵抗した都市民

「5月22日事件」前後に顕在化する蜂起先鋭化にまず不安を覚えたのは、「カボシュ党派」のブルギーニョン派の騎士やパリ大学関係者であった。しかし、蜂起支持の都市民の思いにこの段階ではまだ変化の兆しはなかった。具体的な動きがかすかに読み取れるようになったのは、それまで沈黙を決め込んで静観していた官職取得者などを含む富裕な有力都市民層の対応の中においてである。それでなくともアルマニャック派支持者と目されがちで、混乱の中で仲間が粛清されるなど危険な立場にあった人々であった。

これらの人々は蜂起には警戒心をもちながらもパリ市の自治権拡大の動きの中で、また、「王国改革」の機運やパリ防衛という現実的課題の中で蜂起への同情心をもってはいたが、蜂起急進化の変化を目の前にその思いも急速に薄れていった。⁽⁶²⁾そうした動きを代表するものがJ=ジュヴェネル

の行動であった。国王弁護士であった有力都市民の彼は、蜂起の自立化に困惑を示し始めたブルゴーニュ公との会見を実現すべく再三にわたりアルトワ館に出向いている。結局、交渉に臨んだ公に対して、彼は食肉関連業種の人々との関係を切って現状の事態解決の調停者として振舞うべきとの提案⁶³⁾をしている。この彼の行動自体は受け入れられることはなかったが、この段階における保守的な有力都市民層の思いが蜂起の暴力行使の停止による秩序維持にあったことを教えてくれる。

その後の蜂起の展開は先に見たとおりで、パリ市行政ばかりか王国行政にまで介入するその勢いを多くのパリ都市民は遠巻きに眺めるにとどまっていた。ますます暴力的となったカボシャンの支配強化は、公債の強制的な割り振り負担の場面でその本質を露にした。蜂起に批判的となった有力都市民へのこの政策の実施で対立の構図はよりはっきりするようになった。蜂起が都市内対立の段階に突入したのである。この非妥協的事態の推移の中で、再度、蜂起に抵抗するの行動が見られるようになるのが7月14日以降であった。7月10日にノルマンディーのヴェルヌイルでアルマニャック派によって開催されたカボシャン蜂起調停の調和会議結果が国王の下に伝えられたのを受けて、パリ市庁舎にて国王、王太子、商人頭、J＝ド＝トゥロワを除く助役等が会合を持ったが、ここに市参事会委員や夜警団関係者が呼び寄せられている⁶⁴⁾。彼等は少なくとも5月下旬ぐらいまではカボシャン蜂起に王国改革などの面での期待から支持を表明し、そればかりか夜警団約3千人を組織するなど蜂起に積極的に参加してきた人々である。例えば、5月10日に確認された1万2千人の白の垂れ頭巾を身にまとった蜂起衆がサン＝ポール館に迫った時には、間違いなく蜂起衆として立ち振る舞っていた面々であった。彼等は、この直後に会合会場に武装した100人の蜂起衆とともに乱入した蜂起指導層による、「国王および王国都市パリへの裏切りとして逮捕する」との脅迫にも動揺せず、ここではっきりと王太子支持を表明している。蜂起前半にはカボシャン蜂起衆として活

躍していた夜警団の中核部分が、ここに反カボシャン側に転じて「第三の勢力」の後援団体と化したことが認められる。

この「ポイントワーズ和平」合意を望む反カボシャンの機運は8月2日にさらに高まっている。「第三の勢力」の都市民組織を謀ったのがJ=ジュヴェネルであった。その動きは前日にベリー公とブルゴーニュ公が国王と国王顧問会に報告したポイントワーズの和平提案について、国王の要請によって商人頭や助役たちと各街区の代表者が市庁舎に集められた時に確認されている。蜂起指導者たちが、これを「偽装和平」と断定してカボシャン蜂起勢力にとどまるよう強要したにもかかわらず、先にみたように助役の一人R=ド=ペロワ、両替商のピエール=オジェ、G=シラッス等がこれに抵抗し、受け入れるかどうかは翌日以降街区ごとに決定すべきであると提案している場面である。パリの夜警組織が完全に「第三の勢力」支持に傾いた瞬間であった。そして8月4日に数千人になる夜警団を組織できたのは「第三の勢力」だった⁽⁶⁵⁾のである。

おわりに

以上、蜂起展開の分析を中心に蜂起の諸側面を再構成してきたが、これらの作業から見えてきたところを整理しておきたい。各章ごとに明らかになったところを総合してみると、やはり「4月27、28日直後」、「5月22日事件前後」、「7月末から8月4日まで」の3段階に分けることが当蜂起理解にとって有効だということになる。別言すれば、蜂起の性格が時系列的に大きく変化していることが明確となったということであろう。

第1段階では、1月30日の全国三部会開催以来の王国行政の実権掌握をねらったブルゴーニュ公らのヘゲモニー闘争の流れの中で蜂起勃発を捉えることが肝心であろう。最初、蜂起衆の中核を担ったのはパリ16区総ての夜警団であり食肉関連業種の人々であった。蜂起指導者、商人頭、助役達、ブルゴーニュ公および公の配下の騎士、パリ大学がそれぞれの立場で

行動して最大で2万5千人前後のパリ都市民を組織している。蜂起スローガンは史料上に確認できないが、蜂起の推移からして「王国改革」の推進、50人におよぶ悪徳顧問官や役人の解雇・逮捕、アルマニャック勢力の軍事的攻撃からのパリ防衛による平和維持であった。さしあたり「カボシュ党派」としてのまとまりをもって王太子らの「第三の勢力」の巻き返しを阻止する実行使の段階であったと規定できよう。「王国改革」委員会の作業も大いに勢い付いたと思われる。

第2段階は、蜂起の先鋭化が目立っている。「カボシュ党派」の中の食肉関連業種およびその周辺の業種の人々など約130人が中核となり蜂起は自立化し急進化していった。白い垂れ頭巾を身にまとい、第1段階に見られたスローガンの徹底化によってG=ボワの言う「豊穡の角」に群がる、王国役人として暗躍していた貴族や聖職者、さらには身分王政的権力機構内に組み込まれていた特権的富裕都市民層の逮捕・投獄・処刑が強化された。結果的に、「第三の勢力」に属する貴族や聖職者のみならず富裕都市民層までが粛清の対象になりうる、都市内対立の様相が作り出された。

「カボシャン党派」内の有力者は「カボシャン勅令」発布による蜂起の沈静化を図るがこの段階の蜂起衆の政治的狙いとは一致せず、また、ブルゴーニュ公およびブルギーニョン派の有力者やパリ大学との政治的結合の枠を超える動きとなったため、「カボシュ党派」が事実上解体することとなった。蜂起指導層がパリ市だけではなく王国行政にまで介入し影響力を及ぼし始めると、ブルゴーニュ公の指導力は低下し、逆に「第三の勢力」の政治力が息を吹き返した。

第3段階では、アルマニャック派の政治的巻き返しの前に、「第一の勢力」のリーダーであったブルゴーニュ公さえもそれに抵抗はできず、富裕都市民などの「ポントワーズ和平」案支持派が政治的連合を強化した。第1段階には蜂起衆の中核を担ったパリ市当局や夜警組織まで切り崩し、反カボシャンの大同団結の輪を拡大したJ=ジュヴェネル等の富裕都市民達

が「第三の勢力」下の都市民組織として蜂起を終結させている。蜂起指導層の脅迫的発言があってもこの情勢を覆すことはできなかった。というのも、この和平案ではアルマニャック派の軍事的脅威を解消するだけでなく第1段階の蜂起参加の「罪」は問われず、同時に第2段階のような恐怖政治を一挙に阻止することが可能となったからである。その結果、蜂起衆の精鋭として動いていた130人前後の人々は浮き上がり、急速に影響力を失うことになったのである。

このように、カボシャン蜂起はブルギーニョン対アルマニャックとも表現される15世紀前半のフランス王国内の政治的・経済的・社会的分裂という、混乱期に発生した複雑な側面をもつ民衆蜂起であった。シャルル6世の治世になってから身分王政の権力秩序が崩れ、隠然たる力を持っていた封建王政の権力にこだわる有力諸侯の巻き返しによる軍事的対立へと突き進まざるをえなかった封建制の危機状況を、パリ都市民は座して見過ごすことができなかった。マイエ蜂起（1382-83年）以来、剥奪されていた王国都市としての諸特権を回復させるチャンスでもあった。但し、パリ都市民も一枚岩ではなかった。たとえば、富裕商人ギルドの親方など有力都市民は家産的官僚として身分王政体制に組み込まれていたからである。有力諸侯の御用商人・職人としていくつかの特権を取得している富裕都市民もいた。だからこそ、そうした権益にかかわることの無かった食肉関連業種などの一般の都市民は、ブルゴーニュ公に頼りながらも蜂起第2段階へと歩を進めたのであった。封建的な体制そのものの否定につながりかねないカボシャン蜂起のこの段階の客観的性格を最もよく見抜いていたのは公自身であったとみるのが可能だろう。そのために彼は急いで政策転換を図り、アルマニャックとの交渉に臨みパリから脱出することを選択せざるを得なかったのである。その意味で、当蜂起のもつ多様な性格の中で最も本質的な側面がこの第2段階に現実化したと結論付けられるであろう。

（本稿は、平成17年度専修大学研究助成・個別研究の研究成果の一部で

ある)

注

- 1) 近江吉明「カボシャン蜂起(1413年)勃発の諸前提」(『専修人文論集』第74号, 2004年); 同, 「カボシャン蜂起勃発前夜の動き」(『史苑』第64巻2号, 2004年)。
- 2) Alfred Coville, *Les Cabochiens et l'ordonnance de 1413*, Paris, 1888; id., *Les Premiers Valois et la Guerre de Cent Ans (1328-1422)* in Ernest Lavisse, *Histoire de France depuis les origins jusqu'à la Révolution*, t. IV, Paris, 1910 (後に, id., *Les Premiers Valois et débuts de la Guerre de Cent Ans*, Paris, 1981, として一冊になる); id., *Jean Petit, la question du tyrannicide au commencement du XVe siècle*, Paris, 1932; François-Tommy Perrens, *La Démocratie en France au Moyen Age, Histoire des tendances démocratiques dans les populations urbaines au XIVe et au XVe siècle*, Paris, 1873; Jacques d'Avout, *La Querelle des Armagnacs et des Bourguignons*, Paris, 1943; Michel Mollat et Philippe Wolff, *Ongles bleus Jacques et Ciompi*, Paris, 1970 (M=モラ, Ph=ヴォルフ〈瀬原義生訳〉『ヨーロッパ中世末期の民衆運動』ミネルヴァ書房, 1996年); Jean Favier, *La Guerre de Centans*, Paris, 1980; Bernard Chevalier, *Les Bonnes villes de France du XIVe au XVe siècle*, Paris, 1982; Georges Picot, *Histoire des Etats Généraux considérés au point de vue de leur influence sur le Gouvernement de la France de 1355 à 1614*, Paris, 1872, réimp., Genève, 1979; Martin Saint-Léon, *Histoire des corporations de métiers*, Paris, 1922, reimp., Genève, 1976; Andre Leguai, *Les Ducs de Bourbon pendant la crise monarchique du XVe siècle*, Paris, 1962; Pierre Champion, *Vie de Charles d'Orleans (1394-1465)*, Paris, 1969. 日本における研究は存在しないが, 堀越孝・『ジャンヌ=ダルクの百年戦争』清水書院, 1984年, 第II章, 「百年戦争後半の幕開け」の中で当該蜂起が全体史的視点から正確に捉えられている。
- 3) 「年代記」としては, 『サン=ドニ年代記』*Chronique du religieux de Saint-Denys contenant le règne de Charles VI de 1380 à 1422*, publiée en latin et traduite par M. L. Bellaguet, t. III, 1842, réédition, 1994 (以下, *Chron. Saint-Denys* と略記), 『モンストルレ年代記』*Chroniques d'Enguerrand de Monstrelet (Collection des Chroniques nationales française, écrites en langue vulgaire du treizième au seizième siècle*, éd. Par J. A. Buchon), t. II, III, Paris, 1826 (以下, *Chron. Monstrelet* と略記), 『ジュヴェナル=デ=ジュールザン年代記』Jean Juvenal des Ursins éd., *Histoire de Charles VI, roy de France, des choses memorables advenues durant quarante-deux années de son règne, depuis*

1380 jusqu'à 1422 (*Nouvelle collection des mémoires pour servir à l'Histoire de France, depuis le XIIIe siècle jusqu'à la fin du XVIIIe*, éd., par M. M. Michaud et Poujoulat), t. II, Paris, 1836 (以下, *Chron. Juvenal* と略記) を使用し, 他に, 『パリ一市民の日記』 *Journal d'un bourgeois de Paris 1405-1449*, publié d'après les manuscrits de Rome de Paris, par Alexandre Tuetey, Paris, 1881 と『王令』 *Ordonnances des Roys de France de la troisième race, recueillies par ordre chronologique*, vol. X, Paris, 1763 も史料とした。各史料の史料学的位置付けについては前稿(近江, 「諸前提」)に譲る。尚, 「カボシャン王令」については, 『王令』の他に *L'Ordonnance cabochienne (26-27 Mai 1413)*, publiée avec une introduction et des notes, par A. Coville, Paris, 1891 および G. Picot, *Histoire des Etats Généraux.*, を利用した。また, 関連史料として *Choix de Pièces inédites relatives au règne de Charles VI*, éd., par L. Douet-d'Arcq, t. I, Paris, 1863 ; *Chronique de Jean le Fèvre seigneur de Saint-Remy*, éd., par François Morand, t. I, Paris, 1876 ; *Les Chroniques du roi Charles VII*, éd., par Gilles Le Bouvier dit Le Heraut Berry, Paris, 1979 も傍証を目的として活用した。

- 4) Guy Bois, *La Grande dépression médiévale : XIVe-XVe siècles, le précédent d'une crise systémique*, Paris, 2000.
- 5) 近江, 「諸前提」84-85頁; 同, 「前夜の動き」157-158頁。
- 6) 近江, 「前夜の動き」167-169頁。
- 7) A. Coville, *Cabochiens.*, pp. 181-184 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 8-9 ; *Chron. Juvenal.*, p. 481.
- 8) 当時, パリは16の街区からなり, 各街区には1人の街区長, 2人の50人組頭, 8人の10人組頭がいたので, 全体では3,056人が組織されることになった (A. Coville, *Cabochiens.*, p. 111)。カボシャン蜂起勃発に際して, これに従わない関係業種の者もいた。商人頭も計画的にというのではなく, 集まった蜂起衆の要求に抵抗できずにやむを得ず夜警団の動員命令を出している (*ibid.*, p.185)。
- 9) *Ibid.*, pp. 184-185 ; *Journal.*, p. 28.
- 10) *Chron. Saint-Denys.*, pp. 8-9 ; *Chron., Monstrelet*, III, p. 2 ; *Chron. Roi Charles VII.*, pp. 54-55.
- 11) A. Coville, *Cabochiens.*, p. 186 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 10-13 ; *Chron. Juvenal.*, p. 481 ; *Chron. Monstrelet.*, II, p. 344.
- 12) *Ibid.*, p. 187 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 16-17 ; *Chron. Juvenal.*, p. 481.
- 13) *Ibid.*, pp. 187-188.
- 14) *Ibid.*, pp. 188-189 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 16-22 ; *Chron. Juvenal.*, pp.481-482 ; *Chron. Monstrelet.*, III, pp. 3-4.
- 15) *Ibid.*, p. 190 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 22-23 ; *Chron. Juvenal.*, p. 481 ;

Chron. Monstrelet., III, p. 4 ; *Chron. Jean le Fèvre.*, p. 77.

- 16) *Ibid.*, p. 190 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 22–25.
- 17) *Ibid.*, pp. 190–191 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 24–25.
- 18) *Loc. cit.* ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 22–25.
- 19) *Ibid.*, p. 192.
- 20) *Ibid.*, p. 193 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 26–27 ; *Journal.*, p. 31.
- 21) *Ibid.*, pp. 193–194. ガン市の代表団はブルゴーニュ公に対して、ガン市の防衛をフィリップ＝シャロレと彼の妻へ託する件についての許可を求めてパリにやっ
てきていた。ブルゴーニュ公は白の垂れ頭巾を着用し、パリ都市民とともに彼
らを迎え入れていた。
- 22) *Ibid.*, p. 195 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 30–31.
- 23) *Ibid.*, p. 197 ; 『サン・ドニ年代記』によれば、フィリップ＝デュ・モン (Philippe
du Mont) なる人物が頭となった武装蜂起衆が、国王の命令を無視してパリ中を
練り歩き60人近い商人など有力都市民の家々を接収し、彼らを投獄したとの事
例も記録されている (*Chron. Saint-Denys.*, pp. 34–35.)。
- 24) *Loc. cit.* ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 32–35.
- 25) *Ibid.*, p. 198 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 38–39.
- 26) *Ibid.*, p. 199.
- 27) *Ibid.*, pp. 199–204.
- 28) *Ibid.*, p. 204.
- 29) *Ibid.*, p. 209 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 46–51.
- 30) *Ibid.*, p. 210. *Chron. Saint-Denys.*, pp. 52–53. 当勅令の内容は、①権力につい
て (第1～89条), ②貨幣について (90～95), ③援助金について (96～131),
④軍会計管理について (132～140), ⑤王国会計院について (141～153), ⑥高
等法院について (154～165), ⑦司法について (166～204), ⑧尚書局について
(205～228), ⑨河川・森林官について (220～249), ⑩兵士について (250～
258) の全10章からなっている (*Ordonnance.*, vol. X, pp. 70–140)。但し、条文
総数をG=ピコ (G. Picot, *op. cit.*, 271–297) は257か条と捉え、A=コヴィルは
これを259か条としている (A. Coville, *L'Ordonnance.*, pp. XI)。当勅令の条文
数も含めた内容分析およびその評価については別の機会としたいが、この勅令
発布を蜂起第1段階の総決算と理解する点ではそれほど異論は存在しない。
つまり、〈表1〉に見られるJ=クートウキッスやP=コションらが、それまで王
国行政内部で暗躍していたとりわけ財務官たちに不当に得ていた利得を吐き出
させ、今後は王国財政に手を出させなくして担当官を減らしこの儉約を進めよ
うとしたという捉え方である (Jean Favier (dir.), *XIVe et XVe siècles : crises et
genèses*, Paris, 1996, p. 230 ; Jean Kerhervé, *Histoire de la France : la nais-
sance de l'Etat moderne 1180–1492*, Paris, 1998, p. 177)。

- 31) *Ibid.*, pp. 327–330 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 54–57 ; *Chron. Juvenal.*, p. 483 ; *Chron. Monstrelet.*, III, pp. 30–32. P=デゼサールの処刑については *Chron. Saint-Denys.*, pp.74–77 ; *Journal.*, pp. 32–33 ; *Chron. Roi Charles VII.*, p. 57. この段階におけるブルゴーニュ公の動揺ぶりの背景を、M=モラと Ph=ヴォルフは「彼は国家を支配しようとは欲したが、変革しようとはおもわなかった」と説明している (M=モラ, Ph=ヴォルフ, 前掲書, 256頁)。
- 32) *Ibid.*, p. 205 et 207.
- 33) *Ibid.*, p. 332 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 58–59.
- 34) *Ibid.*, pp. 332–333 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 60–63.
- 35) *Ibid.*, p. 335.
- 36) *Ibid.*, pp. 338–339 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 70–71 ; *Chron. Juvenal.*, p. 484 ; *Chron. Monstrelet.*, III, pp. 33–34.
- 37) *Ibid.*, p. 339.
- 38) *Ibid.*, pp. 340–342 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 80–87.
- 39) *Ibid.*, p. 342.
- 40) *Loc. cit.*
- 41) *Ibid.*, pp. 345–346 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 116–121 ; *Chron. Monstrelet.*, III, pp. 38–53.
- 42) *Ibid.*, pp. 349–352 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 120–123.
- 43) *Ibid.*, pp. 352–353.
- 44) *Ibid.*, pp. 356–357.
- 45) *Ibid.*, pp. 358–359.
- 46) *Ibid.*, p. 360.
- 47) 『ジュヴェナル年代記』でも2万人と記載して入るが (*Chron. Juvenal.*, p. 481) 『モンストルレ年代記』では6千人前後 (*Chron. Monstrelet.*, III, p. 2), 『パリー市民の日記』では2万4千人 (*Journal.*, p. 29) となっていて一致していない。A=コヴィルでは2万から2万5千人となっている (A. Coville, *Cabochiens.*, p. 187)。他方で、断定するには早いとみて蜂起衆の数を明記せず数千人の武装都市民の存在のみを指摘するにとどめる仕事もある (Bertrand Schnerb, *Jean Sans Peur, le prince meurtrier*, Paris, 2005, p. 563)。本稿では、A=コヴィル説に基づいた。
- 48) *Chron. Monstrelet.*, III, pp. 3–4 ; *Chron. Jean le Fevre.*, p. 76. この段階におけるブルゴーニュ公の立場なり役割について、たとえばJ=ファヴィエのそれ (J. Favier, *op. cit.*, p. 430) などに見られるようにカボシャン蜂起との関係を過小評価する傾向があるが、本稿の分析からすればブルゴーニュ公の影響力を低く見ることは難しい。A=コヴィルにおいても、この従来の認識からは完全には脱却できていない (A. Coville, *Cabochiens.*, pp. 184–191 ; *id.*, *Premiers Valois.*,

pp. 370–371)。当蜂起を1月開催の全国三部会からの流れの中で捉えるならばなお更であろう。少なくとも勃発時におけるブルギーニョン派の関与は公の存在抜きには考えにくい (B. Schnerb, *op. cit.*, pp. 562–564)。

- 49) A. Coville, *Cabochiens.*, p. 204.
- 50) *Ibid.*, p. 363.
- 51) *Ibid.*, p. 365 ; B. Schnerb, *op. cit.*, p. 571.
- 52) *Journal.*, p. 39.
- 53) A. Coville, *Cabochiens.*, pp. 375–376 ; *Chron. Charles VII.*, p. 59 ; B. Schnerb, *op. cit.*, pp. 572–574.
- 54) L. Douet-d'Arcq, éd., *Choix de Pièces inédites relatives au règne de Charles VI*, t. I, Paris, 1863, pp. 367–369.
- 55) Lettres de Charles VI, par lesquelles il accorde abolition à ceux qui on eu part aux troubles à Paris depuis la paix d'Auxerre ; à l'exception de ceux qui sont nommés dans ces Lettres, à Paris, le 29 Aout 1413, *Ordonnances.*, vol. X, pp. 163–165.
- 56) *Ibid.*, p. 164. 蜂起鎮圧直後の王権側のカボシャン認識を示している史料として重要である。ここでの蜂起に対する基本姿勢をさらに幅広く展開し公式に示しているのが、同年9月18日付の「パリの暴徒達によって犯された王族等に対する騒乱と暴力についての開封勅書」(Les Lettres Patentes, touchant les désordres et violence commises en la personne des Princes du sang par les séditioux de Paris, 〈Archives Départementales de l'Hérault, série A-1, folios 334 v à 339 v〉) である。民衆蜂起論の視点からの分析は次の機会に譲りたい。
- 57) A. Coville, *Cabochiens.*, p. 355 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 124–125.
- 58) 「開封勅書」でも、蜂起指導層を実名で非難した後「これに加わった共犯者でもある支持者が、かなり多様な身分、職業、社会層の下で助け合い、強力になった」との分析をしている (Les Lettres Patentes., A. D. H.)。
- 59) 近江, 「前夜の動き」160–162頁。
- 60) Claude Gauvard, *Crime, état et société en France à la fin du Moyen Age*, Paris, 1991, p. 232 ; 近江, 「諸前提」81–83頁。
- 61) 近江, 「前夜の動き」162–165頁。
- 62) A. Coville, *Cabochiens.*, p. 205.
- 63) *Ibid.*, p. 206.
- 64) *Ibid.*, p. 341 ; *Chron. Saint-Denys.*, pp. 82–83.
- 65) *Ibid.*, p. 355.